2025年1月12日　説教「安息日の主」

ルカの福音書6章1～11節

クリスマス関係記事、24年度の御言葉関係記事、年始関係記事と学んできましたが、再びルカの福音書から学んでいきます。この福音書を連続講解はしませんが、今朝は5章に続く6章に入っていきます。

１．ある安息日に（1～5節）

①麦の穂を摘む弟子達（1～2）**「ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられたとき、弟子たちは麦の穂を摘んで、手でもみだして食べていた。すると、あるパリサイ人たちが言った。『なぜ、あなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。』」**

安息日については、出エジプト記 20 章にある十戒の第四戒の部分に詳しいです。そこには、安息日を聖なる日とし、「どんな仕事もしてはならない」とあります。ここにある麦の穂を摘むことは収獲であり、もみだすことは脱穀であり、それらをなすことはパリサイ人から見れば罪でありました。それらをなしていた弟子達をみて、イエスを追及したのです。

②供えのパンを食べたダビデ（3～4）**「イエスは彼らに答えて言われた。『あなたがたは、ダビデが連れの者といっしょにいて、ひもじかったときにしたことを読まなかったのですか。ダビデは神の家に入って、祭司以外の者はだれも食べてはならない供えのパンを取って、自分も食べたし、供の者にも与えたではありませんか。』」**

イエスはパリサイ人にとってもなじみのあるダビデのことを実例としてあげて答えました。つまり、お腹を空かせていたダビデが、祭司アビメレクに食べ物を所望したのです。その時、祭司以外は食べてはならない、聖別されたパンを食べたのです。（Ⅰサムエル6:1-6）。つまり、ひもじくしていたダビデが、ある面では律法に違反していた（レビ24:9）かもしれませんが、そうしたことをあげているのです。

③人の子は（5）**「そして、彼らに言われた。『人の子は、安息日の主です。』」**

イエスは言われました。『人の子は安息日の主です』。マルコの福音書にはこうあります。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたのではありません」（2:27）。

２．別の安息日に（6～8節）

①右手のなえた人（6）**「別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに、右手のなえた人がいた。」**

また別の安息日のことです。イエスが会堂で教えておられたときに、右手のなえた人がいました。マタイとマルコの福音書では片手のなえた人とあり、医者ルカだからこそ正確に右手としたと言えるでしょう。

②訴える口実をさがすパリサイ人たち（7）**「そこで律法学者、パリサイ人たちは、イエスが安息日に人を直すかどうか、じっと見ていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。」**

イエスの公生涯の始めの時期でありましたが、あちらこちらでいやしの

御業をされて評判になっていました。そこで、パリサイ人律法学者たちは、安息日になしてはならない仕事といえる「いやし」をなすかどうか見張っていました。見つければ、告発しようとしていたのです。

③真ん中に立つ男（8）**「イエスは彼らの考えをよく知っておられた。それで、手のなえた人に、『立って真ん中に出なさい』と言われた。その人は起き上がって、そこに立った。」**

彼らの企みを読み取っておられたイエスですが、敢えて手のなえた人を皆の前に立たせました。この男のいやしについては、緊急性のあるものではありませんでした。別の日でも良かったのですが、この人にとっては安息日のこの日だけがチャンスであったかもしれません。男は促されるままに、起き上がってそこに立ちました。

３．安息日に手がなえた人をいやされたイエス（9～11 節）

①安息日にして良いのは（9）**「イエスは人々に言われた。『あなたがたに聞きますが、安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか、どうですか。』」**

安息日には何がなされるべきか。第一にはその日に礼拝がささげられることはいうまでもありません。その上で、その日に善を行うべきなのか、それとも悪を行うのが良いのかと問われます。さらに、いのちを救うのが良いのか、滅ぼすのが良いのかとも問われました。ここにイエスは、安息日を単に律法的にとらえるのではなく、安息日が本当の意味で礼拝的になるかを示さんとしているのです。

②手を伸ばしなさい（10）**「そして、みなの者を見回してから、その人に、『手を伸ばしなさい』と言われた。そのとおりにすると、彼の手は元どおりになった。」**

「そのうえで、イエスは人々を見回しながら、おもむろに『手を伸ばしなさい。』と、手のなえた人に言われたのです。その人が言われた通りにすると、なえていた手は元のとおりになったのです。ということは、この人はかつては手が動いていたのでしょう。そして、何かの病気で右手が動かなくなってしまったのかもしれません。

③分別を失うパリサイ人達（11）**「すると彼らはすっかり分別を失ってしまって、イエスをどうしてやろうかと話し合った。」**

この一部始終を見ていた、パリサイ人や律法学者たちは、怒り心頭となりました。安息日に「いやし」という業をなすことによって、律法を平気で破ったと考えたからです。このあたりから、彼らはイエスに敵意をもち、なんとかして亡き者にしてしまおうと相談し始めたのです。

《結論》 安息日をどのように過ごすのかということは、クリスチャンにとっても大きな課題です。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」（出エジプト記 20：8）とありますが、これは十戒の第四戒です。そして、パリサイ人たちは私達が考えている以上、厳格にとらえていました。「どんな仕事もしてはならない」という部分については、細かく、過度にみていました。今朝の記事の、弟子達の行動に関連する農作業ついては以下のようになるのです。「収獲、脱穀、ふるいかけ、食事の用意が禁止されていました。弟子達はこれらをみな破ったことになります。実を摘むことで、収獲の罪を犯し、手でもむことで脱穀の罪を犯し、殻をはぐことによって脱穀の罪を犯し、それを食べることで安息日食事の用意をしたことになる。これは私達には馬鹿げていても、パリサイ人にとっては、それを破ることは生死にかかわる問題であったのだ」（バークレr―）。パリサイ人達もある面では真剣でした。この問題について、イエス・キリストは、「『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』ということがどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、罪のない者たちを罪に定めはしなかったでしょう」（マタイ 12:7）と述べています。どんなに犠牲的な行動であっても、そこに憐みの心がなければ、その行動は価値がなくなってしまうのです。

もう一つの出来事についても同じことが言えます。パリサイ人は安息日にイエスが癒しの業をするか、しないかだけを見張って、裁こうとしています。しかし、イエス・キリストは安息日であっても、助けを必要としている人が目の前にいるのなら救うべきだと教えます。「あなたがたのうち、だれかが一匹の羊を持っていて、もしその羊が安息日に穴におちたら、それを引き上げてやらないでしょうか。人間は羊より、はるかに値打ちのあるものでしょう。それなら、安息日に良いことをすることは、正しいのです」（マタイ 12:11～12）というイエスの言葉はそのことを明確に教えています。

これらのことをまとめていうならば、イエス・キリストは律法を重んじていましたが、律法を守らせることに主眼がありませんでした。むしろ、律法の根本原則に目を留めていました。それではそれは何でしょうか。律法の根本原則は「愛」です。愛を見失ってしまえば、律法は全うされないのです。律法は冷えた教えとなってしまいます。

私達もパリサイ人のようになりやすいです。律法を守り、守らせる。これを実行することはとても大変です。しかし、ある面ではその方が簡単かもしれません。愛を追い求めることは易しいようでいて、案外難しい。放っておけば、いつの間にか、律法を守り、守らせる方向に進んでいくのではないでしょうか。

愛を全うする道は、神を見上げていて道です。なぜなら、神は愛だからです。神に祈り、生ける神に触れることを目指していくことによって愛の道に辿り着くのです。私達の教会が愛の教会になるためには、主が教えてくださった新しい戒めに立つことです。互いに愛し合うという戒めでした（ヨハネ 13:34）。そこにこそ、安息日の主が生きて働いてくださるのです。この年、私たちの教会は愛し合う群れへとさせていただこうではありませんか。 そして、安息日である聖日を、共に喜ばしく過ごしていこうではありませんか。